vol.3

「命」あるものに捧げる「命」

人間のために役立ってくれる動物（2）

文 中西章男
text by Akio Nakanishi

命について考えるこの連載も、第三回となりました。前回に引き続き「人間のために役立ってくれる動物」の命について考えてみます。

動物園などにいる展示動物も、人間の知識の源であり、また精神の安らぎや娯楽を私たちに提供してくれます。彼らは動物園で繁殖されたものや、野生から保護または捕獲され連れて来られた動物たちです。動物園のような本来と違う環境で飼育することの是非についてはいろいろな意見があります。ただいえることは動物園で飼育されている動物の命は、野生で暮らす同種の動物に比べ、基本的に人間に守られ大切にされているということです。多くは、野生で暮らすものに比べ平均寿命も長く、それぞれの動物が「個々の命」として尊重され、人々から愛され命を全うします。

一方、牧場にいる動物たちの中で、例えば牛、豚、鶏など食用の動物の多くは人間の手により繁殖され、おいしい肉が一番多く取れる年齢になると屠殺され肉として人間に供されます。私たちはこのような動物たちの肉を食べています。食用肉は人にとって貴重なタンパク源でありその他にもいろいろな栄養素を含んでいます。現在の人間社会は、動物たちが供してくれる食べ物なくしては成り立たないと言っても過言ではありません。

給食に登場する牛乳も乳牛から毎日搾ります。乳牛という乳を出し続ける品種があるわけではありません。牛も乳が出るのは出産後子供が育つまでです。そのため人工的に交配し出産させます。約10カ月の妊娠期間を経て出産した後に搾乳を開始します。さらに出産の2カ月後には次の受精を行うのです。乳が出る期間は約11カ月半です。次の子をお腹に宿しながら次の出産を挟み、体調維持のために乳を搾らない2カ月の乾乳期間を除いて搾乳され続けます。このように牛は妊娠・出産を繰り返すことで、ほぼ一年中乳を出し続けるのです。乳牛は、生後1歳半で交配され約2年半ではじめて子牛を産み、その後3回の出産を繰り返すのが平均的です。牛の寿命は約20年ですが、乳牛は5、6年で肉になります。乳に栄養を取られた乳牛の肉は固いので主に加工肉などになります。また牛の乳は牛乳だけでなく、バターやチーズとして私たちの食卓に並びます。人にとってこれも重要なタンパク源です。彼らのことを思い、出されたものは残さず食べたいものです。

帝王切開で出産させた子犬を母犬に面会させている授乳中の一コマ　著者撮影

SDGsが叫ばれる中、私たちにできることは、「肉を食べない」とか「動物実験を声高に反対する」ことでなく、このような事実に目を背けることなく、動物たちの「命」を尊重し、感謝の気持ちを持ち、私たち一人ひとりが「考え続ける」ことではないでしょうか?

獣医師として身近な動物の命を救うことばかりでなく、人間のために命を落とす動物たちには、「無駄死をさせない」「苦痛を与えない」という心構えを持ち続けたいと思います。

Profile

獣医師・獣医学博士。1959年生。1986年日本獣医畜産大学（現日本獣医生命科学大学）大学院博士課程卒。大学ではフィラリア症の血行動態、腫瘍および外科の免疫について研究。1987年東京都杉並区で「阿佐谷ペットクリニック」を開院。小動物の総合診療医として犬猫のみならずウサギ、小鳥、ハムスター、モルモットなど数々の動物を診療してきた。趣味：ゴルフ、モータースポーツ、機械いじり、動物たちとの戯れ。著書：『車イスに乗ったチロ』集英社